

25

天保元年（文政十三年）『花供養』

花供養

校異 底本  
白鹿 竹冷

表紙  
題僉

表紙見返し

はせを葉のかぎりなき心をぬき

出し／＼、日々にあらたなるかげに

したひあつまれるものから、その

大もとに供養するてふ花は風に雨

に薫ひおとろふ。花にはあらぬ人の言葉

の花にぞあなる花の都のひがし山、花

のいただきにほとりする真葛葉の

おひしだり、はひまとふ中に桜さき、  
鳥さひづる春の光近きより、遠きひ  
なの吾ともがらまで、供養する花を  
かゝるあつめたる中につくばひて、花  
にはあらぬ言の葉をしきものとする  
ものは、能登の国の樂齋 歩鶴

文政庚寅の暮春

花供養集

提て居る桜ちり行舞台哉

芳英

手斧遣ひの昼霞む谷

蒼虬

築竹を春のうちから見集て

田美

かは蒟蒻を振う里に出す

梅通

虎落場にかりる尻地の細長き

杜蓼

野分のあともつよき蚊の声

義道

鞠蹴の揃ふて帰る宵の月

月峰

佃の粃をほめて手にとる

あふむ

二挺前吹革の役もらるゝ

千崖

余所の門まで朝水を打

岱李

勿返る海老雑魚籠へひろひ込

岱美

つんぼりと鳴る田の中の鐘

羅閑

呼かける伊賀の飛脚の愛相よく

岐石

つくねて投る上張の煤

蕉夢

陶板の雪もみえ出す夜明前

金菜

時／＼人の住かはる庵

月踞

柴橋の普請も迫る月のころ

卮嵐

わたる小鳥の多き照年

間炊を芋荳膾で呼れけり

きのふの怪我を仰山にいふ

花曇り素足で歩行供の衆

つなぐもろこの夕暮るゝ色

社家領もはるの間は町めきて

砂路の溝の不断埋る

右 百員一順下略

兆三

几乙

土鳥

貨僕

言来

以都美

祖郷

文政十三寅年花供養会

川音も夜はたのもしき桜かな

雑菜そろえに居る台所

今参り先呼なれし名に替て

馬衣ばかりが新しうなる

藍玉の直立もなをる月の前

歩行たあとのやける霧吹

右 歌仙表下略

立介

榛堂

夙也

初六

貨僕

梅通



鶯や草にはおりぬ身のかまへ	ナニハ	鶯雪
老木とはつい気につかず初桜	、	自樂
三日月のかゝれば動く柳かな	、	庵女
春中になき天気なり遅桜	、	一肖
水汲に出ては隙とる柳かな	、	幽草
檉鳥のぬれ羽つくろふさくら哉	、	素明
出直して花を見歩行月夜哉	、	露州
雁鴨の泥首揚る霞かな	、	松子
君が代や藤柄さして畠うち	、	素羅

わけなしに児が引て来る小松哉	、	夏口
山際は少し曇りて鳴雲雀	、	世涼
青柳やむすぼれさうな向同士	、	巨流
一ぺんも大水しらぬやなぎ哉	、	燕子
年玉や雇れ供の門ちがひ	、	巴石
残月のかたはらに出て鳴雲雀	、	梅圃
草の戸の埒なき椿咲にけり	、	松隣
うつぶせてあるや雫も霞む桶	、	蟻兄
水はやし雉子あらはるゝ遠堤	、	公路

鶯や世に美しき米ぶくろ

初桜尾上の麦簞掘に出て

紅梅を目当につもる作事哉

去年から大工つかひや赤椿

人中へ持出されけり墓

凍どけや雨戸の明た岨の寺

ちる花を魚の口より吐にけり

しばらくは粧ふ雲や春の山

、 井眉

、 奇淵

兵庫 墨巢

堺 此方

全

、 檐★（居偏に鳥）

河内星田 魯秋

イガ上野 燕市

万歳や堤を通る高あしだ

蒼虬

雪翁の竹のはねかへる朝

イセ

文外

鮑うつ槌に霞のひろがりて

萩埜

焚火の上をまたぐ戸の口

四溪

月影に貌ふる馬を引まはし

在淵

湖汲で秋風を見る

千崖

右歌仙表

背中から陽炎立て池の亀

伊勢津 久世

見るたびにふりの付たる柳哉

松阪 いはほ

出歩行ば出ありくほどの桜哉	山田	潮花
堇咲うへともいはず杉丸太	、	菊所
花を折かけて拭ふや手の油	、	鶯丘
行雁や枕もあげず二日酔	、	在渕
寝るひまの出来て柳のしだれけり	、	文外
つはりのよくきく家や花の奥	、	萩埜
荳桶の臭もぬけたり梅の花	、	四溪
遊び気のしまらぬ月の朧哉	、	梧青
陽炎や廊下伝ひし猫の跡	、	鶴郊

花盛りつね気のつかぬ屋敷哉  
門内や月夜の外の花明り  
暮の雉子田づら隔て鳴かはす  
居しづまる鶯やがて高音かな  
来る人に水汲するや桃の花  
木がくれて鳴や涅槃の花に鳥  
降雨の約束らしや木の芽時  
けなげさを聞すまじけり初蛙  
里の子の居り習ふや雑煮箸

尾張ナゴヤ  
、  
、  
在名古屋  
荒井  
三川岡ザキ  
東浦 南畝  
宮崎 陽坡  
江戸 何丸  
黄  
旭松  
梅間  
蔦居  
和潮  
卓池

蛙聞顔つゝまぬはなかりけり

雲淡く湖広し春の月

桜見と花見とひとのふた心

鴻の巢も見透す春の月夜哉

行蝶にとゞかぬ牛の歩行哉

松かげへ吹なぐれ行雲雀哉

行雁や枕がへしの夢の中

むつまじう空とゝなふて梅の花

春の雪梅のちるかとみやりけり

抱儀

鶯溪女

桃磯

公石

兔仙

兔丸

双魚

夢梅

麦雨

堀立の家にも安き乙鳥かな	、	以兮
蚕の子の元腹（ママ）したる汐干哉	、	丁癸
ふいと出て雲の邪魔するひばり哉	、	子寅
花曇りするや鏡のおもてまで	、	弧村
ちる花の雪よりしげし隅田川	、	のぶ女
笠ふせたやうな小山や雉子の声	、	貞女
花咲て常になりたる曇り哉	、	応声
栢の木はうへかはりけり山椿	、	丁知
散ためてこぼるゝ花や岩の端	、	溪斎



花の夜や撫て冷つく膝がしら

、 長成

脇にあかで暮るまでつむ若菜哉

、 素芯

家中衆のせまき出口や花大根

下総水海道 星溪

宿とれば庭に樹もあり春の月

、 幻夢

雨はれて風やんで後に海苔のよる

、 八木

山人の白足袋しろし梅の花

、 如水

鶯に手軽き朝の茶漬かな

、 成菌

たつしほの暮てもつかぬ桜かな

湖東辻村在下総 四明

餅引や宵の鼠も春の音

常陸下館 青寮

情売る里にもたゞく齋かな

常陸

柳至

草庵に桐のはへて二葉なりしも

はやみとせとなりぬ。彼許子が

三年にして大木に幅する木あり、

油断すべからず、とのいましめ、今

おもひあたれり

桐の芽や二葉おもへば斧が入

アフミ

里童

かはらぬ顔を見せる乙鳥

夙也

長閑さはたゞらに遣ふ水分て

千崖

何やら辻子に人ばかりする

関札に門のふさがる宵の月

洗ひ上たる酒の元米

右歌仙表

童 也 筆

どういふてよかるぞ花の散木の間

消行や桜にさはる宵の雲

咲をまてば七日目になりぬ山桜

蝶鳥もひまなき花のひがし山

野の桜見たなりにして戻りけり

大ツ 舒六

カタ、 其暁

、 成章

大ミヅ 麦洋

、 一居

花の夜やどこやらにする雷の音

ヲトハ

田美

仁和寺にて

覗く処の多き御室の桜かな

大田

乙都留

柴刈の通りぬけけり花の山

、

麦村

語られぬ夜明の味や山ざくら

、

平沖

桜ほど有て久しく待せけり

ノ田

寵山

人違ひしてもとがめぬさくら哉

万木

北馬

ちる花を掃よせて置垣根かな

南一

並翠

格別によき日を花の曇り哉

辻沢

来志

花に行人数よむやはしの銭  
静さや適の戦に花の露  
日南くさきむしろ畳むや花盛  
眠れとて鳴出す宵の蛙かな  
戸口さすおとあり花の夕明り  
花に来て声のきたなき鴉哉  
宿とりの先へはしるや夕霞  
物貰ふ度にやらすやはつ桜  
大寺の灰買に行はる日哉

、  
高島  
、  
川鹿  
、  
舍羅  
、  
松靄  
、  
宗石  
、  
楚蕉  
、  
梶彦  
、  
月彦  
、  
錦水  
、  
嵐木

西日にも深入するや花の山  
うめて置風呂の加減や夕霞  
月かげや春もひとしほ梅の花  
道すぢへ雫しにけり初桜  
白梅や正月中の筒の花  
磨水の上澄したる余寒かな  
明ぼのゝ桜にはやき戸口かな  
嵯峨御室日和ながらの花曇  
三日月の花に入けりあらし山

、  
、  
、  
、  
八マン  
白ヒゲ  
、  
、  
嶺月  
楚丈  
自笑  
春躬  
外明  
寛楊  
芦州  
嵐泪  
白哉

月影やいたづらにちる山ざくら

、 太令

△注▽白鹿、作者名「天令」。

高ノ、と一本咲ぬおそざくら

浅小井 鳥都雄

花の暮つゝじも提て戻りけり

安土 秋月

梅咲や踏かためたる畠の土

豊浦 花遊

降音の一日おなじ春の雨

、 嵐山

たとへにもならぬ桜の盛り哉

辻村 星嶺

湯だて場に残るけぶりや春の月

町ヤ 芋丈

握らるゝだけ梅折てもらひけり

、 有慶

涅槃会や人に習ふて藁草履

金堂 負米

あながちに降にもあらず花の雨	コボシ	亀楽
出て見るも十歩の空や梅の月	葛青	里童
つら／＼と月日のみゆる柳かな	七里	巳兆
かぞゆれば降日の多き桜かな	日ノ	士明
冴返る春に逢ひしよ鮎鱈	、	和月
珠数くりにわさ／＼出たり梅のもと	仁正寺	一嘯
若草や馬の嘶く宇都の山	飛驒高山	暁夢
黄鳥の先へ廻りて二声め	、	有美
傾城の素顔も見るや山桜	、	万里



曙や山のはし／＼帰る雁  
出這入の邪魔にもならぬ柳哉  
鶯や若草の戸はひるばかり  
見くらせば鳥も宿かる桜かな  
藪かげも在所ありてや紙鳶  
頬杖に折／＼とゞく梅の馨  
菜の花の照り合せけり渡り川  
山吹や瀧に消るゝものがたり  
降までの雨を油断の花見かな

曾慶  
如松  
三友  
信州上清内路 素風  
六川 白兔  
信州 巖松  
肝洗  
上毛イセ崎 紅碩  
赤堀 丹頂

まことしき春の遊びや小松曳  
藪入の二人はいるや向ふ側  
鶯にはきちぎりたる木の間哉  
庵の戸のひん曲りたる雪翁哉  
人の気のしづまり口やちる桜  
はき飛す鯛の鱗や春の水  
背戸あれば我薺ほど青みけり  
野の梅やをれば腕に響きける  
燕や爺が小みせのわら草履

下毛 みち雄

オク南部盛岡 卓堂

、田名部 一毛

二本松 文骨

会津 香雪

、 金塘

、 万拙

、 苔経

、 蘭山

三月の空におし出す山の雲

春風や貝吹ならふ小山伏

元日やさし出顔なる梅の花

立されば又匂ひけり門の梅

人みえてひるも散也嗟峨の花

散花の松にひつゝく名残かな

いつまでも霞ませたいぞ磯の松

ちる花に初手は驚く驚かな

朝の山見るや霞の出来不出来

、 坦然

、 仙羽

、 静花

、 魚守

出羽アキタ 御風

湊 宗三

越前丸岡 友圃

ウルカ 如積

、 月砂

手を組てしばらく居る桜哉

斧はかりても長閑なる谷

こもにまく干鱈四五枚塩はいて

あちこち人のまたぐ水縄

ぱち／＼と蕎麦売燃る暮の月

湖水を背戸に雁の早来る

綿時に地子をせはしう取立て

当座の風邪をかさ高にいふ

カミ  
文章

一雄

太甫

立介

超翠

一斗

晴霞

其麦

膝へのる猫を手あらく払ひ退け

帷子かして汗臭くなる

火をとりて芦へ押しこむ涼み船

ひくても垣はしまりよき所

ぼつくさと月のさすまで習ふ経

膳まつうちに夜寒覚ゆる

仕わけして松茸籠にかざる也

矢立の墨の裾へなだるゝ

うか／＼と土橋ふみかく花の空

知雪

雄 草 介 甫 斗 翠 麦

春浦

ひるからさきの長き日のあし

巢立してついても行ぬ鳥の子

店も手厚に見ゆる薬種屋

聳方はみな参宮を済されし

ひとつになつて乳母もさゝやく

納豆汁のあとを洗はず返す鍋

ごそ／＼暮につよき木がらし

惣井戸の鍵を預かる角の家

いつも袴で出らるゝ爺

霞 雪 浦 草 雄 甫 介 翠 斗

あれたれど市の鉢木の直を聞て

跡からふえる月のまかなひ

蜻蛉の来ては行灯の灯にさはり

縄なふ処は下冷のする

竿竹でかたよる丸太つき流し

臂で背中へまはす脇差

葺たての屋根に一雨小気味よき

茎をくはへてはいるつばくら

朝の間は花に見知らぬ顔ばかり

霞 麦 浦 雪 雄 草 介 甫 斗

門畑までも仕舞ふ藍蒔

翠

右歌仙行

長閑さや戸口／＼の捨草履

金沢

満美

一年の愛相に折る庵の梅

、

淇翠

折て来て捨た椿ぞ朝の門

、

其麦

更てから木影の出来る春の月

、

文草

文箱へまげて入たる柳かな

、

太甫

花ばかり掃ずに居るむしろ哉

、

立介

客僧の足にしたがふ花見かな

、

年緒



はる風や駕からもらふたばこの火  
一あかり梅に返すや虹のあと  
手の皺をひとり詠て春の月  
先／＼の蛙に長き堤かな  
春もまだ寒し垣根の玉子売  
霞こんでどちへもゆれぬ野藪哉  
山水ですむかいわいや梅の花  
呉てやるあとでも折るや梅の花  
入船の波のうねりやゆふ霞

、  
、  
、  
、  
、  
、  
、  
、  
、  
、  
、  
、

超翠  
錦石  
商齋  
秋平  
年風  
黄年  
可杏  
左翠  
蘭窓

人の来て日／＼に広げぬ春の草

梅十

牛ひきの間をつうと行雲雀

逸龜

鶯やしきりにほしき人の藪

柳士

うぐひすのひよつと出たる木の間哉

少年 柳更

長閑さやむしろのうへの獅子頭

素文

牛の子の直入も出来てお焚桜

鳳中

鶯に追付て行田道かな

柏奚

ちる花を何にもせずに詠めけり

固来

手あぶりのよく間にあひし花見哉

清由

橋どめの縄張をとく柳かな  
 葩煎なども栄耀買する花見哉  
 染たてを着揃ふて出る花見哉  
 一処で暮て仕舞ふや桜がり  
 詠居てくるゝもしらず山ざくら  
 堇だけまはつておりる小坂哉  
 乗物のつきすえてある柳かな  
 湯あがりのまゝにむかふや夕桜  
 鶴が舞ふとて人の退く桜かな

、  
 、  
 、  
 、  
 、  
 、  
 、  
 、  
 大正寺  
 宮腰  
 呼亭  
 亀巢  
 松呼  
 一雄  
 月雄  
 可陸  
 晴葭  
 宇牧  
 棹江

長閑さやはしを伝ふて鐘の声  
田の人のくはへきせるや藤の花  
まだ奥の桜しらせよ山がらす  
手をついて渡る橋あり雉子声

山吹や流れの外のたまり水  
霞む日や鳩の来て踏垣根草  
腰かけるむしろがこひや春の風

夕山や雲雀見て居る爺と婆々  
春雨のざんざと降や鴨の上

、  
白葵

、  
蜂舎

、  
羽黄

、  
葭流

、  
注▽白鹿、作者名「葭塚」。

、  
東畦

、  
白令

、  
北園

注▽白鹿、作者名「此園」。

、  
木雄

、  
石羊

宿引の昼も来て居る桜かな

朧夜やかすり鳴する巢の鳥等

正月も事なふ立てうめのはな

手の皺ものびるやうなり春の水

生壁に蝶よりつかぬ花の空

十分に春をもてなす椿かな

をるやいな馬の荷にさす桜哉

猫の鳴あとから霞む隣かな

梅が香のうしろは垣の雫哉

、 丹嶺

山中 青介

ノト穴水 李径

、 免三

、 似翠

、 李之

、 鶯々

、 石兄

、 秋応

みよしのは広いもの也花の比  
世の中は育ちやすけれ雀の子  
はる雨や藁打はたのちよろ／＼火  
田にぬくみ持や霞の離れ際  
小大工も無事な顔して花見哉  
尾を立て飛や余寒の斥鷃  
籠の鮒背鰭動す余寒かな  
ちる花に置処なき行燈哉  
夜更るや高き所に猫の恋

、  
、  
、  
、  
、  
、  
七尾

蘭溪  
如松  
樂齋  
ゆみ女  
西垵  
六更  
竹塙  
半江  
柳枝

大声や小声や小田に啼蛙

鶯の来鳴や森の朝神楽

笠取て置したよりも啼蛙

休み日に馬場の柳の雫かな

烟たつ上にひら／＼啼雲雀

出代や宵にして置暇乞

満月の在所の中や猫の恋

雪もけふ踏ちからなき梅の花

花やある小路も人の往来する

、

、

、

、

、

、

、

ノトへ

二ノ宮

見盃

東籬

梅明

魯峰

可成

魯川

古雀

真舟

蘭秀

猪を追ふ山のちかさや梅の花  
杖はまだ袖のうちなり梅の花  
咲までの桜を人の捨にけり  
厨子の戸の明てあるなり散る桜  
何心なくも出て来るはるの山  
浦の灯はともりてあるよ八重霞  
ちるからはよし野もちれよ山桜  
日も赤うなりて入けり花の山  
鶏のみす／＼ふえて桃の花

武部 北鼎  
、 迎月  
八幡 巴木  
、 花溪  
皆月 路月  
越中高岡 麦車  
、 烏翁  
富山 葦村  
、 凡丈



人なみに衣紋つくらふ余寒哉  
鶯のいきりもせぬや谷の中  
折た桜寺にあづけて遊びけり  
裏口や山吹咲てふね下す  
水のわく寮や桜のもらひだめ  
鶯や今ごろ節もかはるやら  
杉柏おされ／＼に霞みけり  
付木火ではきもの直す花見哉  
朝霞菜籠の雫落にけり

、  
、  
、  
福ノ  
、  
、  
、  
、  
木司  
あふむ  
石甫  
宇井  
伯芝  
全  
栢浪  
全  
半戈

追分でちよと見た人や梅の花

召替の馬も出て行桜かな

菜の花や今来たやうな裸足跡

うった網花だらけにて上りけり

桃咲や時計がようて酔過す

貝がらに水たまりけり花の朝

鶯の今朝は鳴ふとおもふうち

嘉例にも桜をしるゝ山家哉

春の水物にまぎれず流れけり

、  
、  
麟年

、  
、  
砺山

、  
、  
全

、  
、  
全

吉久  
保久亭

滑川  
百尔

本郷  
笠可

、  
、  
さちか

つい晴る雨合点して揚雲雀  
 梅が香やせまき二階の上り口  
 手のひまや鶯籠を懸直し  
 明たてに吹こむ花の埃り哉  
 接木して気の立雨の一夜かな  
 口もとへ星のうつりて啼蛙  
 友誘ふやうすもみえず鳴雲雀  
 桃咲や朝登りの船多し  
 野鴉を叱る声あり朝霞

、	、	今石動	伏木	岡村	植生	福光	、	和泉
龜三	梅甫	魯由	一濤	桂阜	龜毛	五丈	仙果	東川

初午や出村の市の日が替る	、	見推
古菰をはねよけたればつく／＼し	、	校古
行雁やながめるうちがちさくなる	、	桃田
鶯や椿ばかりの古やしき	、	鶴衛
行義よう傘さして来る春の雪		甫海
提灯でたばこのみ行野梅かな	福町	貫魚
休日の普請場へ来る乙鳥哉	、	虎十
掃よせて見て居る花の別かな	、	兔園
山吹に鱗はきこむ垣根哉	、	丁斧



青柳や呼び起さるゝ舟の人

初花に水引入る田一枚

うめが香に覚束なくも月夜哉

川除にいつかさしたる柳かな

たら／＼と月は残りて雉子の声

朝見ても草臥の出る藤の花

睦でなし祖父が自慢の桃の花

春の月わらべしうなるこゝろ持

なの花や隣の祖父もする軒

、 、 、 、 、 、 、 、

白乎

学二

鳳吹

素考

其誠

亘春

文鶴

師三

士宝

台所などゝ杭打花見かな  
うしろ向前むき花の戸口哉  
一構ある鶯の山家かな  
二階から見古す山や残る雪  
道ひとつへだてゝ雨の柳哉  
梅比や少しも見えぬ池の塵  
尻がるに小用も聞や花の空  
手一ぱい摘で舟まつ蓬かな  
水の手を見に戻りけり花の中

、 蠹々舎  
見附沢  
北洋  
、 岡野町  
董水  
、 高田  
甫時雨  
上十日市  
守白  
丹波シノ村  
蕉夢  
山本  
其朴  
、  
雪童

つゝと来て扇子ならずや花の前  
うれ残る中に翌日咲椿かな  
ひはふはと埃りの多き柳哉  
中庭やはつかながらに竹の秋  
松に日のちら／＼として散桜  
四五人になりて花ちる夕かな  
どつさりと真向に花の月夜哉  
心よう日は暮にけり花の山  
幕串を配るや梅の月に日に

カメ山 野楊  
保ヅ 烏舟  
須知 俵瓜  
サ、山 田城  
、 冠雪  
大山 武陵  
古佐 兔秋  
、 有隣  
、 歎之



飯時もあるに一日啼ひばり  
貧乏もなく出て董摘にけり  
春の風よけい聞たし松の陰  
牛馬の顔も長閑や丹波口  
石川の明りへ出たり椿道  
鋤遣ひはかりても野は霞けり  
石一つなき街道の柳かな  
海遠く月朧なり松の隙  
あだにちるものともみえず夜の花

丹後田辺 杜雪  
瓜青  
巡孝  
笹雄  
馬良  
宮津  
万籟  
柳絮  
但馬二方チハラ 月波  
広居

松越にさくら散来る麓哉

山吹や戸口替たる草の庵

春雨やわり木の匂ふ草の宿

寝たければ長／＼とねる胡蝶哉

折ふとはおもはざりしに岸の梅

雨近うなるや木の芽の夕明り

青柳をぬけて又ある漁村哉

遠山や巢の蜂かはる／＼行

隣にも灯をさし出すや梅の花

、  
月亭

、  
一之

浜坂  
素六

因幡  
浅掲

伯耆横江  
雪江

石見銀山  
古園

矢上  
梨雪

、  
森俊

、  
黙々

^注V白鹿、竹冷は、二四丁が落丁。

霞む夜とおもひ初るや鶴の声  
遊び人の二度も渡りて春の水  
夜の明るおとや余寒の水車  
客立てしばらく寒し春の月  
花近く来て折ごゝろ矢にけり  
麦によき雨といふなり花盛り  
居風呂の加減もよくて夕柳  
雉子啼や木の芽ふくれん其度に  
両方に池ある道や木瓜の花

、  
、  
、  
谷住江  
ハリマ魚崎  
宇佐山崎  
平ヅ  
ソネ泥中更  
ワタセ  
草々  
菊雄  
蒼阜  
万丸  
露庵  
節之  
五芳  
其曉  
樵風

飲水にこぼるゝ花の明りかな  
盛りかとみる間に落る椿哉  
鶯や人手にかけぬ朝掃除  
瀬の音の不断になりて梅に月  
紅梅や人付合のよき御寺  
鉄気田でとりまく家の余寒哉  
藪の梅見せて返すや状使ひ  
折口もみせぬ桜のさかり哉  
鶯の立かまへして鳴にけり

ツマ井  
比延町  
山田  
千本  
、  
ヒメヂ  
、周水更  
中尾  
美作ツ山  
六英  
古谷  
魯人  
琴止  
奇峰  
曾夢  
茶田  
千尋  
澄月

乞食の煙りを立る彼岸哉

備前西大寺

騎龍

暮るゝともしらずらりと花に人

備中松山

羽霓

せなの子をおろせば董こぼれけり

笠岡

太六

今暮る鐘の聞ゆる桜かな

備後福山

白麟

如月の初夜や雁の啼戻る

全

小社の夜を有明て藤の花

宮内

蕉雨

引鶴や夕日の残る峰の松

鞆

一蕉

如月も月夜となれば閑なり

、

炉沸

明る戸に先鶯の初音哉

、

青塢

城下まで一筋道や鳴雲雀

初花に橋踏直し渡りけり

大鳥の羽音もするや八重霞

夕かすむ中やひと声浦の松

花盛り曙しらぬ山家かな

暁はふるき響きや御忌の鐘

花ちるや尋に来る落しもの

菜の花や野越山越眼のだるき

都に春を迎へて

、  
塘雨

、  
応雅

三原  
あや輔

アキ木谷  
其月

、  
其玉

、  
積水

三津  
左来

広島  
玉桐

明行や桜を右に四方の春

下枝は踏道ならぬつばきかな

蝶の羽に初雷の響き哉

昼の月雲雀の背中に隠れけり

江の上や思ひのまゝに梅の花

池水のゆれ／＼たる雉の声

紅梅や捨鶏諷ふ堀の上

只ひとつ古溝に啼蛙かな

夕鳶の晴口見たり山桜

、

、

周防岐波

紀州田辺

、

、

、

、

阿波白地

蠖齋

野雨

阿道

逸仙

文岱

可章

李徑

青乙

一秀



山水に濁りのつくや雉の声

花の陰出れば無縁の人もなし

ひっそりとして日の暮ぬ春の湖

山吹や笥の残る家のあと

毎日の鶯遠し池の面

花の香やふけて火を焚台所

傘のかげさすや蛙の啼田づら

花ごゝろ田に一ぱいの水が来て

雨過やみなになりたる春の雁

、  
、  
雪鼠

、  
トク島  
梅子

アハヂ  
樗秀  
青柳

サヌキ河内  
其岳

ワダ浜  
今是

、  
小豆島  
松濤

白鳥  
蘿雄

峨月

雀等も一手にかすむ小藪哉	、	李上
菜の花やあぶら日和の気草臥	丸亀	茂椎
夕朝の来て花になる水田かな	、	夢蝶
寝返れば磯の香近し春の月	イヨ宇和島	素亭
人跡に居てよく見ゆる桜哉	、	月叟
うぐひすの口にもあふや京の水	、	市橋
帰る時山の名を問ふ汐干かな	、	文昇
桃の花小枝投こむとなり船	、	槐庵
草臥たこぶしのはるや朧月	吉田	鶴雄

腹のたつやうに聞ゆる蛙かな  
咲てからみなかたぶくや江の桜  
赤土の手につく日なり花曇  
下駄提て野道廻るや鳴蛙  
蛤の口に戻るやまつの風  
鶯の山路はなれて初音哉  
故里のけしきわすれぬ柳哉  
空晴て人を動かす桜かな  
ひつそふて更る計ぞ月と梅

、 、 、 、 、 、 大洲

和融 蟾居 堇圃 木兄 月村 后来 素彩 帘丈 蕪九

山吹の水に暮けり二日月	、	蘿山
しみついてあるや若菜に塵一つ	、	壺堂
一曇りうけて啼出す蛙かな	、	鸞齋
もの問によれば客あり桃の花	、	円外
滝しぶきうけて花もつ椿哉	、	柏年
木瓜の花をる気になれば赤過る	、	蒼蝶
毎日の花にしづまるあらし哉	、	桑戸
星一つ見て落付ぬはなの空	、	一行
つばくらや夜は明て行小田の注連	、	稼暁

鳥と我が中よき朝の椿哉

新谷

鳩台

おほやうにあるじ見て居る桜哉

、

田波

ありたけの傘に降也春の雨

嘉木

雨巢

長閑なる空や来る鳥いぬる鳥

今治

素橋

若草にはやちらかりぬ糖埃り

土佐高知

董厓

梅を見て戻る余寒や二日月

筑前

蓼袋

日の落るはしの一木や桃の花

、

夏椎

山間やよき家みえてはるの月

、

鶴池

暮る日に蝶のきげんの余りけり

、

五涼

雨と見て人の来る也夜の花  
突おろす舟のうしろや雉の声  
海道の中から見える霞みかな  
寝ごころにあてゝもみたり初桜  
椎の木の中にみて置桜かな  
家建る下地も久し啼蛙  
鳥さしの城下はなれず春の雪  
立しほに結ぶや花の下流れ  
青柳をくゞるまでなり別座敷

、 、 福岡 、 、 、 、 、 、

藻真 蕪園 梅光 文里 器洋 南高 斗丈 士烏 月平

錠さすや花見に出たる田舎家  
人に付て渡る花見の小橋哉  
貝はかる門の冷たき三月かな  
長き日に草臥て降小雨哉  
灯火の有明寒き雪翁かな  
花の夜の明方光る野水哉  
松かげはたしかにみえて春の月  
鞍壺にぬくもり付や雉子の声  
合)

、  
、  
、  
、  
、  
、  
、  
、  
秋月  
黒崎

甫六  
宇逸  
蛙堂  
乙牛  
臥山  
野竹  
待我  
★然(口偏、旁は草冠に  
不山

菫しく日もまた出来ず梅の花	姪浜	貫士
茶たばこに栄耀の付や春の雨	小竹	立沙
川入の馬牽むける柳かな	、	対山
鶯や雑木交りの竹の中	香袋	友堇
ひとり居れば明る過けり留主の花	博多	松二
其中にしづまる声や朝蛙	、	南礎
春の夜やもの音もなき壁隣	ケントウ	遅梅
雉子の声宮の灯はまだ消もせず	木屋瀬	若拙
ゆるき日の中を這出る田螺かな	赤間	香輔



夢のあと案に違はずなく蛙  
花の陰小声になりて人の居る  
又ひとつころの塵の接木哉  
啞つきに付ていそぐや花の道  
花に来てかゝれば雲のみな白し  
畑打を見ておもたがる小袖哉  
花を踏ときは短し鳥の脚  
咲花にあやにく多き寝鳥哉  
草麦の露打つけの朝日かな

筑後クルメ 幻化  
、 与山  
豊前小倉 末父  
、 鳳左  
、 松風  
、 木齋  
、 可推  
、 里水  
、 素瀬

此あたり花踏わけて啼蛙  
 鶯の初音を雨にぬらしけり  
 人の来る日とはなりけり初桜  
 青柳のうごきしまへば月夜かな  
 梅あれば家あり山の裾づたひ  
 鐘ひとつ二つはまたで四方の春  
 老の身や花くたびれの七日過ぐ  
 筋違にかぶる衾や桜の夜  
 近／＼と曙うごく桜かな

猪膝 蘇永  
 、 仙里  
 、 紫川  
 、 三更  
 水崎 月虚  
 ブンゴ日田 一樵  
 、 雨芳  
 、 葦州  
 、 桃紅

鶯や丸太を流す瀬の早さ

、 国東

花六

うぐひすの初音やたはむ竹の枝

、 玉骨

足袋脱で折にかゝるや梅の花

肥前大村 悠々

梟の啼声かえよはるの山

、 雪満

居合ぬく座敷の音や赤椿

、 素琴

鶯に少しゆるめて下り坂

、 静湖

松杉の中よりもちる桜かな

、 仝

陸近く舟を漕けり桃の花

、 梅左

泊りには最ふほどもなし葦草

、 仝

駕下りて細道行や梅の花

島ひとつ見透すころや雉子の声

座敷から直に出立や蝸とり

しつかりと行処もなし花の比

手を折れば柱にひびく余寒哉

梅咲や寝勝手をいふ泊り客

雉子の来るときけば持たじ山の畑

庭にとる水の自由や咲つゝじ

よい牛を飼ふ家並や藤の花

、

、

、

、

、

、

、

、

、

其青

全

小左

全

方庵

全

柳阿

全

有両

音のよい流れははなの咲処  
 花の香の雲をそゝぐや筏さし  
 桜からおし出して来る日和かな  
 花のころ寝られぬ嵯峨の夜每哉  
 朝の間に降仕舞ひけり春の雨  
 門の花又提灯の行どまる  
 まだ寒き春よ野をこす雁の声  
 春雨や箕先にあふつ粟のむし  
 おもふ事の只もの瘳て春の雨

、	、	諫早	天草	唐津	、	、	、	平戸
詠帰	北岱	霞林	正焉	井畝	仙杖	紅袁	朴山	亀年

花の酒下戸といはるゝ人もなし  
三日月のたのみもありてはつ桜  
捨し子は人となりけんうめの花  
若草にしくものはなき小雨かな  
正月やつかひ尽せし肴籠  
蛤が鳴て交すやおぼろ月  
ほろ酔て小道さがすや春の風  
世話しらぬ聒が顔なり桃の花  
とり付たまでに春めく月夜哉

、 、 、 、 、 、 、 、

文洲 春里 乙人 古硯 之卜 白亀 芦雪 素岡 史敬

小流れをたのむ嫁菜の愛相哉

雨漏のさはぎ紛れや帰る雁

しらぬとし折て居る也山の梅

白箸の乾くひまありはなに鳥

笠敷てつく／＼\みたり花と水

只ひとり花見る人のこゝろ哉

果もなき花よ霞の山つゞき

大空もせはしと咲や峰の花

人の来ぬ山里もがな夕ざくら

、 棠雨

長崎 甫旧

、 其映

肥後クマ本 梅士

、 亀梁

全

、 葉重

全

、 一瓢

霞みよりこぼす匂ひか花の露  
汐をおす力もなくて春の月  
夕風やつれなき山の花しぐれ  
在明の気を引たてる桜かな  
土産にぬれて帰らん花の雨  
門に鍵つるして出たり花の坊  
夜るの戸や人静まりて花匂ふ  
ひや／＼と花にうつるや夜の瀧  
有明の花に静けし月の暉

、 、 、 、 、 、 、 、

女

柳雨 仙鶴 源 山路 松雨 硯水 唇風 露桂 喃々



花のかげ我かげ月にふりかはる

咲ぬ間の雨は嬉しき桜かな

桜売て帰るさくららのゆふべ哉

戸もさゝず寝て居て花のあるじぶり

夕暮の空に残るや凧一つ

夕ぐれや葦こぼれし渡し舟

黄鳥の声のうちなり岡の松

青柳の今朝は届きし流れ哉

眠らふとしては葦をたつ小蝶

、 蘭叢

、 杉里

、 旭扇

、 瑚璉

日向美々津 吟竜

延岡 双鳥

壱岐 文耕

、 桃水

、 女 みや

塵埃りしづまりやすき柳哉

月朧なるや種撰綿の中

夜あらしの果を柳に残しけり

、 对馬

梅舟

其雷

東指

旅籠屋の追立汁や朝の花

ひそ／＼と誉る声あり鶏合

居並ぶとやがて立けり帰る雁

山鳥の尾のしだり尾に花の宴

二三足草履もみえて春の月

仲秀

金菜

貨僕

蘿閑

鼠舌

茶の下をもやして留主や花の春  
米磨だ濡手に蝶のとまりけり  
雉の声十声に一度見るやみず  
山吹や舟から揚る蔵の土  
泣やめと子にさはらすや遅桜  
春雨やけふも寝て居る薪舟  
梅提てことしは早し礼戻り  
物申はふるしつかりと花見客  
縄ばりを我手にとくや桃の花

女

世南 十丈 梅價 月峰 百池 羅浮 凡鳥 白糸 杜萊

沼中や下りたつ鶴に初霞

女

みを

松にみえ藪に見え日はいらぬ也

鹿川

山吹や足の埃りを落す処

路鳥

咲にけり今年の花の夕月夜

不調

見えるだけ二階は寒し山桜

在京

雪丸

落風を鋤ふりあげて教へけり

、

且齋

おもひ切て折てたしなし梅の花

サガ

寸楽

朝桜深山ごゝろにもどりけり

、

一楽

ひちまがり／＼けり春の水

、

丈翠

山間や二軒して見る梅の花  
霞む日やむしろたゝきし川向ひ  
旅人のあとへまはるや朝ざくら  
夜深さは花より落る雫哉  
宿かさぬあはれも花の日数哉  
ひつそふて友鶯のはつ音哉  
起て行蝶や日のもる竹の中  
若草や朝めしまでの一仕事  
灯をいれて猶面白き桜哉

岱李  
杜蓼  
几乙  
若雅  
兆三  
芳英  
梅通  
並隆  
岱美

問れけり旅の事より花の事

舟の酔さめてよりちる桜かな

足あぶる竈土のそこらも若菜哉

植屋のあと片付やなく蛙

初花や何やら庵の小世話しき

ぬり立た女きたなし山桜

子雀や一日朝の音がする

行春をこまかに打や磯の浪

苗代の幣に這よる田螺哉

言来

以都美

子竺

洞睡

梅笠

芹舎

仝

素山

恩古

幹撫てまはるや花の戻りしま  
いる入は折れし梅のあたり哉  
山吹に油断の小鳥吹れけり  
あとへ引やうな声あり春の雁  
うかひして気のあらたまる桜哉  
明る夜の蛙残るや田の四隅  
霞でも鴉にはまじらず都鳥  
山吹や暮かけて又色の出る  
草笛の声にまぎれて呼子鳥

女

李角 乙彦 吳明 初六 蘇山 祖郷 完和 とせ 其成

朝桜けふもめでたき雲の脚  
さし荷ふ植木も霞む城下哉  
人の来て匂はずなりぬ月の梅  
嗽ぐ水もさくらも狩あてぬ  
尻むけてめし食ふふりも花見哉

土鳥  
榛堂  
夙也  
千崖  
蒼虬

かきもらしたれば爰に出す  
梅咲て工合の違ふ雨戸かな  
影踏で月に驚くさくら哉

甲斐  
三石  
備前  
蘭阜



朧夜の松高うして山低し

イヨ今治 汝省

馬買ふて出れば柳の野風吹

、 郊馬

小松引鳥古巢を見出しけり

、 鳥朝

寝ごころや嘶のたえん松の内

、 円月

どんみりと虻の日和をつくりけり

石州浅り 一芦

蜂の巢や不性に伸る日陰草

尾ナゴヤ 雪居

みめぐりて座を失ひぬ花の陰

ミノ神戸 楚雀

△注▽白鹿本、三九ウは白紙。

三九ウ

日は低う見せて柳の夕ごゝろ

石州浜田 北麟

^注V白鹿本、この一行の句はなく、「追加」とある。

鶯や米食ひ尽す庵の朝

奥盛岡五ノ戸 文喬

梅が香や朝精近といふ日から

、 序哉

明ぼのにぬるゝけしきぞ春の山

、 班和

松原につゞく流れやはるの月

、 蕉秀

ちら／＼と夜明をみせるつゝじ哉

、 三李

何処見ても風はないぞや土筆

、 車丈

噂して山を下りれば春の月

、 貫呂

帰りにはばら／＼になる小鳥哉

、 班鳧

はな紙をみな出しかけて梅の花

人声に夜は埋れし桜かな

花のなき樹よりも淋し散桜

うぐひすやかつ／＼鉢のもらひ米

行空や花に三日の隙もなし

三日月のをがみ処や齋さく

あればある此さびしみやつく／＼し

温泉の島や寝るによき日の夕霞

門にまつ子もなし旅の夕桜

、 青珠

肥前田代 五百衛

、 砂楽

、 都蓼

、 希石

、 一桂

、 梅調

越後庭月 誼老

、見付 万里

つく／＼と浮木に乗りし蛙哉

酒持て人の見舞ふや夜の梅

ちる花を埃りにたゞく蕙かな

雑役の中へ落けりいかのぼり

星ひとつ峰に残りて雉の声

鶺鴒近く見たり子の日の行戻り

行燈にかゝる薺の雫かな

聊なかげややけ野の二日月

誘れて松を曳気に成にけり

、蓬亭

、村松 周詮

、加州金沢 白二

、扇路

能州宇土津 桃幼

豊後杵築 杜厚

筑前秋月 鶴史

周防白松 鼓吹

ハリマ新宮 鼓吹

花見んと宵から寝れば月夜哉  
案内のある間梅みる戸口かな  
畑うちと向ひあはせの鴉かな  
人の跡たゝひて居るさくら哉  
をし鳥の一羽なかるゝ霞哉  
はたごやの埃りをかぶる柳哉  
雪翁の音やあかるき庭の内  
下駄すげた泥手を拭ふ柳哉  
鶯やひとつ大きう成し声

、 平津  
丹州笹山  
、 保津  
撰 伊丹  
大坂  
イセ津  
、  
近 土山  
大の  
其曉  
守豊  
梅庵  
草方  
鯉明  
團積  
麦村  
虚白  
月坡

摘といふ日にはたしなき薺哉  
 けふはへたやうな気で摘若菜哉  
 青淵のひとしほ青し花のひる  
 今投た土器すぐに霞みけり  
 霞みより出てかすみぬ塔ひとつ  
 子供等がぬれ足で来る柳哉  
 野鴉のうれしき声や花の春  
 をる枝のなくて淋しき野梅哉  
 こぼれ雨までも霞むや東山

、 八マン 夜外  
 、 舟木 磯海  
 、 大ツ はる岑  
 、 米友  
 、 蕙布  
 イセ山田 外松  
 ブンゴ杵築領 花六  
 奥州会津 慶々  
 宇治 君波

山で呉れた桜這入らぬ戸口哉

八マン 嘉涼

広椽やひと風花を吹入る

乙雅

瓢箪は枕となりぬ花の陰

酔露

小社の古びみゆるや花盛

よう女

おもふだけ眼がとゞかぬや夕桜

南溪

△注▽白鹿、この丁はここまで、後の四句は無し。

道へ出て歩行て居るや春の雁

八マン 太令

万歳の昇下してすはる泊り哉

下総左原 桐雨

やぶ入の先おちつくや松の雨

兵庫 印南

折たやら梅こぼれけり塀の外

信楽 楓下

付録

立先の急度見られつ春の雁  
台処の向きにはをしき椿哉  
ゆり輪にもたまるやう也春の雨  
山風の間にも吹て春の風  
はるの風近江の鮎のとゞきけり  
行人と来る人のある霞哉  
昼食に万才行や作場道  
たつぷりと夜汐の来るや梅の花

江戸

八朶

、

得蕪

、

幻芝

、

麻交

、

有月

、

万頃

、  
下総

小蓑

、

斗圍



歩行神つくや若菜にまた今年

白はしもよこれ安さよ梅の花

田におりる雁ひとつづゝ霞みけり

風呂に居るうち慰むや巢の雀

行あまりゆき後れては花に雨

長州下ノ関 岑麿

、 益三

東江州 南飛虎

尾ナゴヤ 夜白

阿波 梅双

京東洞院通

湖月堂

御摺物所

菊屋平兵衛

仏光寺上ル町

裏表紙見返し

裏表紙